

モンテーニュとルソー

——その学芸批判の比較検討——

高橋 誠

Michel de Montaigne (一五三三—一五九二年)が、Jean-Jacques Rousseau (一七一二—一七七八年)の思想に及ぼした影響の巨大さについては、ルソー自身の諸著作が、そして、両者を研究するそれぞれの思想家たちが、これを証明し、そして、是認する。それにもかかわらず、両思想家の思想の内部構造にたちいる論及から、その影響の度合を確定するところまでは、これまで、かならずしも十分になされていまいかに思う。モンテーニュの「エッセー」第二巻第十二章「レモン・スボンの弁護」とルソーの「学問芸術論」に託された両者の思想の類似と差異との探求をこの小論の課題に設定した第一の理由は、ここにある。この課題は、第二に、近代社会の成立史を自覚的に認識するためのひとつの基礎作業として設定された。近代思想の「源泉・モンテーニュの思想とそれの代表的な体现者ルソーの思想とを比較し、前者の内実の後者における在・不在を確認することにより思想の次元で近代社会の成立史をモデル化する」というささやかな意図の第一のころみである。

ルソーにおける学問・芸術(以下、学芸、と略す)の批判は、モンテーニュにおけるそれと等しく、みずからが生きた社会の現実を批判するために具体化されたひとつの社会批判の形態である。ここにおいて、両者の学芸批判は、その発想にまで及ぶ類似性を保障される。すなわち、第一に、学芸は人間的自然を否定する、という点において、第二に、その学芸が傲慢から発生する、という点において、以下、両者にみられる学芸批判の類似と差異とを、この順序にしたがって検討する。

(一) ルソーのテキストは、つぎの版に依拠し、以下、引用は、(S.12)のように略す。S.は、この版の「学問芸術論」を、12は、この版のページを、指示する。

Jean-Jacques Rousseau, Si le Rétablissement des Sciences et des Arts a contribué à épurer les moeurs, "DU CONTRAT SOCIAL, LETTRE A DALEMBERT, etc." Classiques Garnier, Éditions Garnier Frères, 1962.

モンテーニュのテキストは、つぎの版に依拠し、しかも、すべて引用するテキストは、一五八〇年の初版に現われたテキストに限られる。以下、引用は、(E.512)のように略す。E.は、この版の第二巻第十二章「レモン・スボンの弁護」を、512は、この版のページを、指示する。

Michel de Montaigne, Essais, texte établi et annoté par Albert Thibaudet, Bibliothèque de la Pléiade, 1950.

一 学芸と人間の自然の否定

モンテーニュとルソーとは、学芸が人間の自然を否認する、という点において、まず、その見解を同じくする。

ルソーはいう、「……諸学問、文学そして芸術は……かれら（集団をなした人間たち——筆者）が背負った鉄鎖の上に花環の飾りをひろげ、かれらがそれのために生まれたと思われるあの始源的な自由の感情をかれらのうちで窒息させ、かれらに隷属を好ませ、そして、かれらを統治された国民と呼ばれるものに形成する」(E. 6)と。学芸は、人間としての人間の生存を保障する自由の否定の上に栄える、とまず規定される。ところがルソーにおいては、この自由の感情は、人間の自然の感情に、そして、それが本来的に保持する徳の基礎に等しい。「……われわれの魂は、われわれの諸学問・芸術が完成へと歩みを進めるにしたがって、腐敗した」とのべ、この事実を顕示する。「……墮落は現実である」(E. 6)と断定する。かれにとって、この人間の道徳的な墮落こそ、人間の自然に対極し、これを拒否する人間の状態なのである。

(117) 研究ノート
モンテーニュは、このルソーにはば二世紀先んじて、学問による人類の墮落と滅亡とを洞察していた。かれはいう、「智慧と学問とを増大しようとする欲望こそ、人類破滅の第一歩であった。この道によって、人類は、永遠の責苦へと落ちこんだのである。傲慢(Orgueil)は、人類の滅亡であり、その墮落である」(E. 553)と。第一に、傲慢によって生まれる学問は「…

…われわれが破壊しあい殺しあって、われわれ自身の種属を滅亡させる学問……」(E. 523)である。この学問は、「人間のペスト」(E. 547)と換言される。かれの生き抜いた時代は、階級対立が宗教的対立として現われ、血が血を洗う宗教戦争(一五六二—一五九八年)の時代であった。この戦乱の原因を宗教改革に求め、そして、その宗教改革が傲慢の具体化である学問の主張によってひき起された、とかれは理解する。学問は、まず、人類の滅亡を意味した。第二に、学問は人間の悪徳の根源である、とされる。「^(a)「^(a)このこと」(cette liberté de l'Imagination et ce dérèglement de pensées)から、人間を圧迫する罪、病い、迷い、葛藤、絶望という悪の主要な源泉がうまれる」(E. 506)とかれはのべる。この「悪の主要な源泉」は、人間の自然に対立し、「……われわれが諸事物にかんしてもっていると考える思想や学問の感化によってわれわれがうけいれる心の動揺……」(E. 556)である。かれにおける学問の第一の規定・それによる人類の滅亡は、この第二の規定・それによる人類の墮落、の極限において現われる。

(2) これは、*imagination*を含む *présomption*、いわゆる「人間の理性」の概念に抱括される。これについては、拙稿「モンテーニュにおける理性の二重性とその現実認識の構造」『一橋研究』第九号、一九六二年、二五—三四ページ、を参照されたい。

モンテーニュの語彙・「心の動揺(trouble)」は、ストア哲学の「*passion*は正しい理性に対立し、自然にそむく魂の動揺

(trouble)である」という、その passion あるいは trouble に、そして、懷疑主義におけるアトラキシー(平穩にして自然な心の状態)に対立する概念に、極似する。それゆえ、かれにおける学問は、ルソーにおけるように、人間的自然に対立しこれを否定するもの、として規定される。

(c) Les Stoiciens, textes choisis par Jean Brun, P. U. F., 1957, pp. 98, 101

モンテーニュにおける学問が、人類の滅亡とその墮落とを結果する、という二つの規定を与えられるのにたいし、ルソーにおける学芸は、人間の不道德化にその機能を集約する。この相違は、両者の生きた時代背景の差異からうまれる。しかし、ルソーは、学芸の他方の機能を把握しなかつたわけではなく、モンテーニュのうちにすでに指摘されうる歴史による証明という発想を援用して、モンテーニュにおける第一規定に近似するそれを、過去の歴史のうちに規定する。

たとえば、かれは、ギリシャ没落の時期が諸芸術の進歩した時期に合致した、と理解する。「……諸芸術の進歩がなされると、習俗の壊敗とマケドニアの束縛とが、すぐにそのあとを継いだ」(9)とかれは指摘する。ローマ、エジプト、コンスタンティノープルの没落は、いずれも、学芸の進歩が原因であった、とされる。モンテーニュにおける第一規定は、ルソーにおいても同じく、前者における「人類」に代った「社会」あるいは「国家」の滅亡、において規定される。

両思想家が学芸による人間的自然の否認に同意するとき、学

芸に対極する人間的自然の実体についても両者の主張はその基本点において合致する。

ルソーが、人間的自然の属性として、学芸に対立する概念、無知・単純・無垢・粗野・貧窮・自然の欲求・正直・勇氣・軍事的美德・義務などを、そして、これらの属性を体现するおそらくは実在した人間・農民を、指摘するのと同様に、モンテーニュは、無知・盲目・単純・素朴・従順・謙虚・服従・純潔・非文明化などを、そして、これらの属性を体现した実在人・職人あるいは農民を、あげる。ルソーにおける無知……貧窮は、モンテーニュにおける無知……素朴と同じく、人間の自然であり、これを保障する基礎要件である。それは、いずれも無知に収斂する。

この基本点で合致する両思想家の人間的自然の概念は、しかし、その無知によって実現されるその無知を含めた徳の発現形態において、異なる。すなわち、ルソーにおいては、肉体・精神的「活力」として、モンテーニュにおいては、自然・神への「服従」として、現われる。この差異は、前者における、スパルタ人の「英雄的な諸行為」(9)への礼讃、あるいは、「肉体の力や活力が見出されるであろうのは、農民の粗野な衣服の下である……」(9)という農民の規定、となつて、そして、後者における、宗教戦争に介入せずに自然の推移と伝来の信仰に服する「……みずからを自然の赴くにまかせて学問も占いもたずに、ただその時の感情に依りて事物を測る農民……」(E. S. 4)への思慕、となつて現われる。同じく倫理的価値の

体現者として措定された農民は、前者においては、「宮廷人」と対比された未開人的自然人であり、後者においては、特定の信仰に生きる宗教的自然人である。

これは、両者における学芸による墮落の態様の差異に対応する。

ルソーは、十八世紀フランスの現実における学芸による人間の墮落を糾弾して、「猜疑、不安の陰、恐れ、冷淡、謹慎、嫌悪、うらぎりが、上品さのあの様にして虚偽の翼の下に、つまり、これほどにも空虚なあの優雅さの下に、たえず隠されている。この優雅さにこそ、わが時代の光明は由来するのである」(S. 6)とのべる。そして、「余暇」「良い趣味」「奢侈」(S. 13, 14)などが悪徳に加えられる。これら悪徳は、「楽しみの手段」にまで化された学芸の進展段階に対応した悪徳であるがゆえに、根深く、かつ、その発現形態も粗暴な直接性を迂回した、優雅さ・上品さに媒介される間接性をおびる。これにたいして、モンテーニュにおける現実的人間像の属性・悪徳の発現形態は、より直接的・具体的である。「非恒常性、不決断、不確実、悲しみ、迷信、不安、野心、貪欲、嫉妬、羨望、……、戦争、虚偽、不忠誠、中傷あるいは好奇心」(E. 538)、そして、恐れ、野心、革新への志向、反乱、不従従 (E. 559) は、十六世紀フランスにおける社会的無秩序の直接的な反映である人間像の、具体的な指標である。ルソーにおける悪徳の態様は、未分化・内向性・間接性・静態性であるのたいし、モンテーニュにおけるそれは、外向性・直接性・動態性をその特徴とする。

る。そのために、前者は、すでにのべたように、より動態的な「活力」を人間の自然の有力な実体として規定しようとし、後者は、「従順」によって獲得されるより静態的なものをその実体として規定しようとした。

モンテーニュとルソーとは、同一の発想を駆使して学芸批判を行ないながら、形式であるその発想を把持する実体において、いくつかの差異をみせている。この差異は、両思想家における学芸の発生源の把握において、さらに明確となる。

二 学芸の発生源と傲慢

モンテーニュとルソーとは、学芸が人間の傲慢から発生する、と考える点においてその見解を同じくする。

ルソーは、諸学問が、迷信、野心、憎徳、追従、虚偽、貪欲、虚しい好奇心、からうまれる、と規定したあと、つづけて「すべてのもの、そして、悪徳でさえもが、人間の傲慢 (Crainte humaine) からうまれる。それゆえ、諸学問・芸術は、その生誕をわれわれの悪徳に負う」(S. 11) という。学芸は、まず、人間の傲慢に淵源し、悪徳がその媒体の機能を果たして、うまれる、とされる。

この傲慢は、学芸を起すにあたって悪徳をどのように媒体とするのか。この点についてかれは、「余暇のうちでうまれた諸学問は、かわって、この余暇を培う」(S. 13) と、そして、「諸芸術・文学のつぎには、他のはるかに悪い悪徳が続く。それが奢侈であって、それは、人間たちの余暇や虚栄からうまれたそ

れら(学芸―筆者)と同じようにしてうまれたものである」(9, 14)という。ここで、余暇・奢侈・虚栄は、学芸の発生とその結果とに必然的に付随するものとされる。これら悪徳の各項の關係は、余暇が学芸によってみずからを保障され、その余暇は奢侈を随伴し、そして、これら余暇と奢侈とに支えられて虚栄(傲慢)が学芸をうむ、という回帰的關係にあるものと推定される。学芸の発生因はあくまで傲慢であるが、他の悪徳は、この傲慢の学芸への具体化を保障する、という機能を荷う意味において、傲慢の媒体たりうるのである。しかし、学芸の発生における悪徳というこの媒体の措定は、ルソーが、その現実批判である学芸批判の対象として設定した特定の階層を配慮することなしには、ほとんど理解されえないことがらである。

モンテーニュは、ルソーと同じく、学問の発生因を傲慢に求める。かれは、「……われわれは、判断の自由奔放さ(La licence de notre opinion)によって、誤って、理性、学問、尊厳などをわれわれのものとし、その資産としている」(E, 537)と、あるいは、「人間を普通一般の道から放り出し、諸もろの革新への志向を抱かせたのは、この傲慢であり、そして、永遠の罪への道に踏み迷い抜け出る道を失った一群の人びとの指導者になったり、誤謬と虚偽との説教者になることを人間に好まされたのは……まさにこの傲慢である」(E, 553)という。この場合、革新への志向・永遠の罪への道・誤謬と虚偽は、かれのいう「学問」である、と考えてよい。また、そのような学問を人間に与えた「判断の自由奔放さ」は、*analogie* や *conjecture* と

ともに、「人間的理性」と同じ意味内容である。ここに明らかのように、まず人間的理性が学問の発生因である。

ところが、モンテーニュにおけるこの人間的理性は、傲慢を通してのみ発現される。人間的理性は、その「形相」(E, 9)である自然・神の恩寵を宿さない理性である。理性の有効性の根源・形相を荷われないがゆえに、人間的理性は、いかなる能力をもたない。この人間的理性(*raisonnement*)は、そこで、傲慢(*orgueil*)を介してのみ自己を対象化する。人間的理性の発現形態・傲慢は、モンテーニュにおいては、その人間的理性の無根拠性である。

したがって、ここでいうかれの「学問」は、「永遠の罪への道」あるいは「誤謬と虚偽」と同値でありうるし、同時にまた、学問の発生因も人間的理性の具体化された傲慢に求められる。

ここから、モンテーニュのいう傲慢がきわめて宗教的な制約をうけて規定されるのにたいし、ルソーのいう傲慢が宗教性をより排除して規定される、という差異がうまれるとともに、ここに、両者の思想のもっともいちじるしい差異が由来する。すなわち、その差異とは、両者の思想における、傲慢の具体化を保障する領域の差異である。

すでにのべたように、モンテーニュにおいては、傲慢は、人間的理性がそれみずからを発現する具体的な形態である、という関係を人間的理性にたいしてもつ。これにたいして、ルソーにおける傲慢は、余暇・奢侈という悪徳を媒体として、はじめ

て、学芸の發生因たりうる。すなわち、モンテーニュにおいて、傲慢の学芸への転化を基礎づけてこれを可能にするものは、人間的理性それ自体であり、ルソーにおいては、それは、余暇・奢侈という悪徳の共存である。

モンテーニュにおける人間的理性それ自体、そして、ルソーにおける余暇・奢侈の共存、というそれぞれの傲慢がその具体化を許されるこの関係領域の差異は、そのまま、両者の学芸批判の対象領域の差異となつて現われる。すなわち、モンテーニュにおいては、学芸批判の対象は、人間的理性それ自体に、ルソーにおいては、余暇・奢侈を樂しむ特定の階級に、設定される。

かれの学芸批判は、この意味において、十八世紀中葉のアンシャン・レژیム下における特権的有産階級にその焦点をむけた現実の社会批判である、ことがここから明らかにされる。それゆえ、この批判の基本原理をなす人間的自然の実体も、かれにおいては、モンテーニュにおけるそれと同じく、まず、無知でありながら、余暇（無為）の対概念である精神的・肉体的活力をその主要な属性としなければならなかった。

人間的理性にその批判の対象を定めるはかなかつた他方のモンテーニュは、ルソーと異なつて、宗教戦乱の直接的原因を宗教改革に求めながらも、なお、特定の階級をとらえて社会それ自体の内部でこの批判を遂行することができなかった。かれをルソーから隔てるこの巨大な差異は、十六世紀フランスの社

会的無秩序がかれに社会それ自体を認識しうる範疇を把握せなかつたこと、そして、このことのために、かれ自身が世界を永遠に動揺・流転する認識不可能な存在と規定せざるをえなかつた (E. 679) こと、に淵源するであろう。その結果、ルソーが特定の階級という社会の特殊な領域においてその学芸批判を現実批判たらしめたのたいし、モンテーニュは個別的でありながら同時に普遍的な十六世紀フランス人間一般という領域においてその学芸批判を現実批判たらしめたのである。

ここに、発想の顕著な類似を示す両者の思想の分れ目がある。一方のルソーが、さらにその社会批判を推進して、すでにこの段階においてその構想を示唆する「不平等起源論」を経て「社会契約論」へと、他方のモンテーニュが、自己自身からの人間的理性の除去という自己否定を契機に人間的自然の十全なる獲得へと、それぞれの思想の營為を進展させた分岐点は、ここにあつたのである。

しかし、この分岐は、両思想家の思想の異質性を示す指標なのではなく、それは、市民社会の成熟度に対応して、モンテーニュにおける近代思想の萌芽的結実がルソーにおいて社会化された、ことの指標なのである。このことは両者における自然観・教育論にみられる類似と差異とが明白に証をするであらう。

(一九六三年十二月十六日) (一橋大学大学院学生)